近世紀聞

淙崎延房輯

三編

文久三年秋

中之事迹

巻之三

イ13
530
0

門 1 13
號 530
冊 9

近世紀聞三編卷之三

東京　淡崎延房輯

○縣令殺誅して浪士等五條に據る支再説此月十三日　朝廷決議在らせられて大和行幸の趣き後此日　御沙汰に及ばれうべ豫て幕吏の苟安策計るを切齒做して居たる藤太鉄石松本謙三郎吉村寅太郎など喚れたる慷慨の有志七八十人京師に滯在なりるゞ額を聚めて談ずるやう這回　御沙汰の趣きは大和に

大正十三年二月
花房仙次郎氏寄贈

行幸在しき　御親征の御軍議成遊べされんとの御支なれど今朝紳のうちより於く真の正義と思ハるゝ三條殿外甲乙と指を屈する迄ふしき中ふを幕意に泥むもいと諸侯もあるに齊しくしき或ハ攘夷を好まぬいきを今大和にて御軍議に及ませ給ふ支いうとも鬼角に議論因循しき機會を失ふ支いうん仍く我々大和に至り　御親征の御待受と号し彼地の諸藩を威服なさしめ　行幸在らせらるゝに於くゝ　御輦戈促し奉りく至急に函嶺に供奉し在らせ幕吏の奸吏を譴責しく一挙に夷賊　御親征の成功に至らん支猶掌を回すが如けん倘此事件整をば戸戈山野に肆さんのゝ國家の為に棄る命ハ鴻毛よりも最軽う尤も是等の赴きを長州其他正義の藩として今豫め泄す時ハ何れを疎暴の所置ありとく押禁ん支必定せり唯中山侍従殿ふに官位を辞して精忠を磨うんと言ふ深意ふく姑く長門に到らせしゞ今幸ひに帰京在れを此人をしく主将とふし綜を挙るに如きふし と稍評決に及びしゝ頃く件の趣き戈中山卿へ密話せしに侍従殿ふも其意みや在けん歓喜の色

戎露いしく忽地兼諾せらるゝみぞ日ならぬに發途の
准備して忍々に都を立出浪花に至りて勢揃ひゐ
し自ら天忠組と称して夫より河内の狭山に赴き
其地の領主北條家の陣屋に程も遠からぬ報恩寺
といふ寺院に入りて一同爰に屯集るし直ちに二
名の武士戎陣屋へ遣はし言まるやう是も中山侍
從殿より差越されたる使者なるゆ至急に主人北
條氏に面談たしたき旨ゆゑ御陣屋前の寺院迄
早々御出あるべき可き旨最厳重に禀し演れば北
條家にも駭きしゆ主人相模守殿も折節不快に

候得ば面會致しがたく旨断りに及ぶゆゑ然らば
重役方の中差越さるべく望みしゆゑ聽く長臣船
越某田中某両人ゆ彼の報恩寺に趣くゆゑ中山殿
に對面せられて自ら演説せらるゝ這回外夷
御親征在せらるゝの故より不日南都へ行幸の上
御軍議あるべきの条仰出されたるに就て其
節名せらるべきの間北條氏に出張忠情と
れいるべき旨仰出されたるの段御受ありて然る
べしと禀し渡されたるに件の二人も兼ねて
主人に申聞せしに御返答に及ばんとて一先开

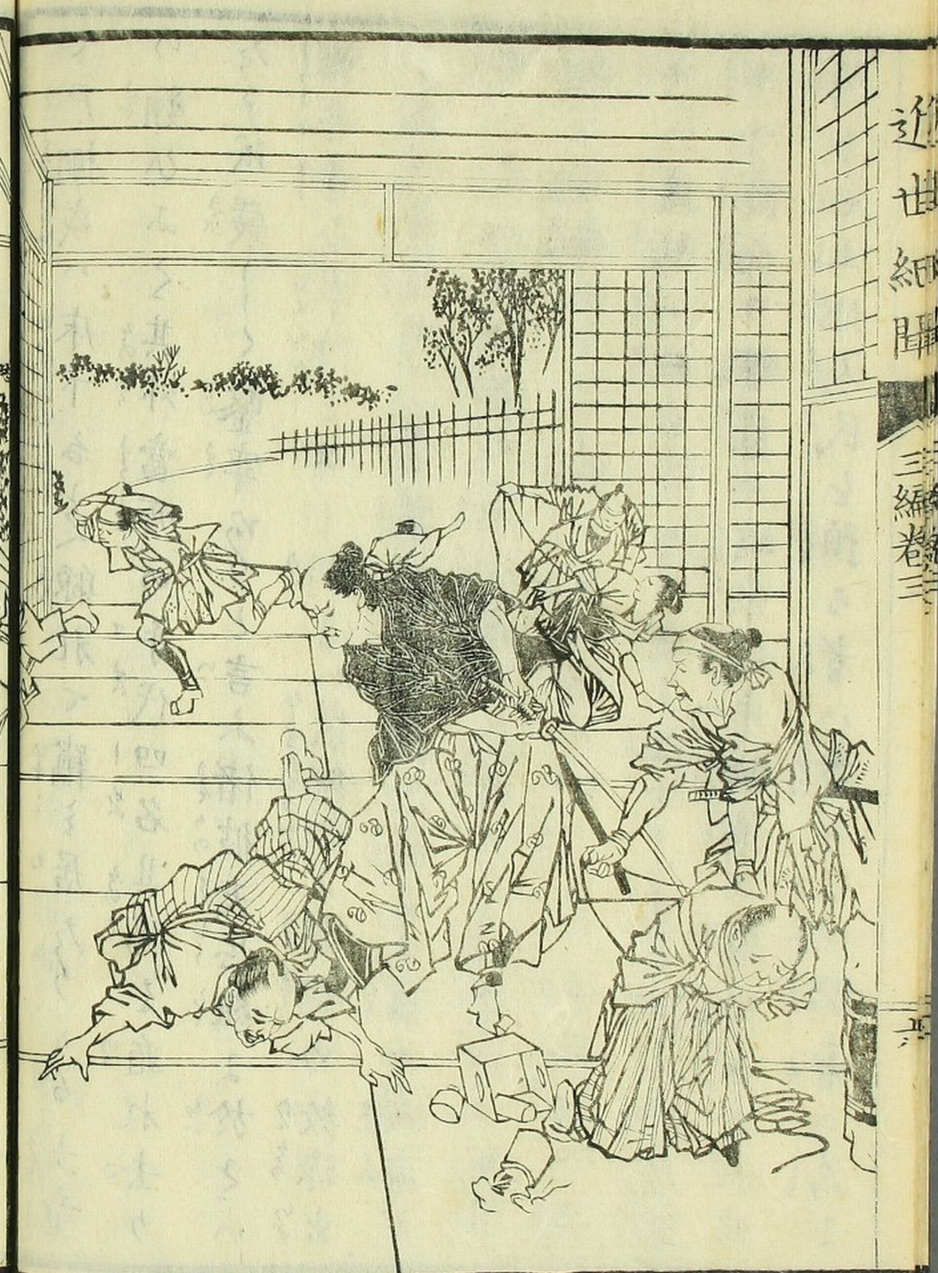
処を退きしゝ再び両人入来りて仰の趣き相摸守へ逐一稟し聞せし処いまゞ　御親征等の儀へ一向兼知も仕らず孫べ夫等の次第表立仰出されし候ゞ其節御受致まべしと返答よ及ぶゝ中山重ねて稟さるゝやう即答致され難きゝ甚だ以て不都合なれど既よ去る十三日　仰出されたる所の　御親征の　御沙汰をべ今よ拝兼せられぎとなら異日の僉議よ及んゞ別よ當家へ御依頼を稟し入れたる仔細なる其故ハ外ゝ〻ゞ卑職　御親征ふ付即ち奸吏誅伐の先鋒たるべき趣きの　勅諚被りて至急よ京師を発せし故後陣の来着致ま迄ハ武器の准備手薄なれた大小砲其外の品姑く借用致した委細の支ハ家来より尚御談トよ及ぶし〻く其侭奥よ入らるゝみぞ其跡ゝく浪士の輩より鉄炮何挺馬何匹鎗幾筋など數を定めゝく頻よ強談よ及ぶゝぞ彼両人ま當惑しく竊よ動静を窺ふ処中山殿の人品骨柄自と威光備りて正しく雲の上人と疑ひもなく思たれど是よ附属の兵士等ハ或ま甲冑を着せしもを或ま素肌の者もありて其打扮も區々なるゞ抜身の鎗など携へて否と言ゞ一突

よ做まを屋く見ゆる面魂ひゆ人甚ざ不審よ思へ共陣屋の備へも浅間ゐるよ倘荒立く乱妨されゐを主人の安危も気遣ハしくれを先づ穏便よ退りせんと種々懇談よ及びしー上渠より望む十分一を渡しく退去させしとぞ尓程よ天忠組よい斯の如きの方畧ふく其餘の領主地頭より馬物の具を借聚め武器の准備も調ひしりば其月の十七日和州五條の陣屋よ到り縣令鈴木源内と喚ゐ、者ふ面會し く此度　御親征御軍議としく當所へ　行幸いるふ付御入用の筋ゐれバ當陣屋ふく支配ゐを郷村総て相受取り　天朝御領よ做まを屋の旨　勅諚よりく馳向へり速よ渡まべしと武威を示して稟し渡せを思ゐけゐき支たれば源内大いよ驚愕せしゲ胸を定めく言へるやう郷村御入用あらば幕府へ仰聞られしうへ関東よりして云々と當所へ下知の有べき処斯く軽卒ゐる御挙動ハ何しを以く心得ゲさし某卑職よ候得ども幕府の命を被り當所の代官たるよ因くく條理の相立ざるうちハ容易よ渡しがさき旨稍抗論よ及ぶふを天忠組よい奮激しく知らぬや卒土の濱たりとも王土よ有ざる支ゐき

彼汝頻りに幕命を重んじ　勅旨を軽蔑致せるの
奸賊倘あるとも忍ぶべくんば何を忍ばざるべけん
我々奸吏誅伐を職掌とする所なれば汝を以て軍
神の血祭にと得させんと言ふより速く多人數
にて先源内を砍伏したるに属する手代等を五六
人程殺戮し其他手代両人と妻女奴婢等の類を
十七八人捕へて縲絏の仮に引立て同所櫻井寺と
言へる人數一同引取りしが其夜二更と覚しく頃件
の陣屋に火を掛て門長屋迄残らず一時に焼
拂ひしに其時焼死せし者なり這い騒動に駭き慌忙

て戸棚或は床下などに躲れて竊に居たりける女童
の類ひふく其外當所の手代四名其場を遁れ去り
たる紙嚴しく鑿穿なりと言ふ偖彼天忠組に於ては
櫻井寺を本陣とし門に紫縮緬に菊桐の紋染出
したる最晴やかなる幕を打張り仮に五條の政府と
唱へて八十四名の浪士達分に應ぜし職務なり且等
級も其差あるべし斯て其次の日十八日に五條村の真
中へ建札一枚出したる是に記せし文に曰く今度當
所へ發向の趣意は近来外夷掃攘の儀仰出され候
得ども土地人民を預る者は專ら已が驕奢の為に

浪士等憤激しく五條の陣屋を滅却せ



民を虐げ候上却ッて攘夷の御英断を妨げ候族多し依て此程　御親征仰出され候ふ付右等の者を取調とゝく出張致し候処縣令鈴木源内儀尤も其甚しき者ゆへ既ゝ誅戮ゝ加へ畢ぬ以後五條支配所の分　天朝御直民ふ候の條神明を敬し君主を重んし必ず　御國躰を穢まゝ此度本ゝ復せしふゝ今年の租税半を免除も此旨小民ゝ至る迄洩ざる様ふ申聞け有難き段拜戴して　御國ゝ忠勤令むゝと斯の如くゝ記載せし札を建たる其上ゝて五條管轄の村々ゝ摠代の者呼出しつ前書の旨趣を読聞せゝ各受書ゝ調印ありしめ叡亦鈴木源内以下手附手代等五名の首級を五條続きふ於る所の須摠と言へる村外れゝ刑罪場ゝ遣ハして頭て梟木ゝ肆したり徳なして後近郷ゝ地頭の家来を呼出して　天朝ゝの御用ゝつき當年の収納高ハ當政府へ納むべく又百石ゝて一人宛最も勇壮の者を選ゝ一人草鞋十足ゝ鉄炮所持の輩ハ一挺ゝ携へゝ急速當府へ差出ざゝ歟く倘まゝ異論ゝ及ぶゝ於てゝ違　勅の逆罪なるゝ故ゝ直ちふ誅戮なるべきゝと否と言へさぬ厳達なるふゝ何れも

大いに恐怖して一同承服せし程に又幕府より掛置く所の制札を書改め専ら士人を手懐けて兵を召集す頻りなれば人心大いに奮起して國家に志ありしも又尓ならぬを招きしに應じて追々五條に到りしうば天忠組の威勢は稍盛大に及びける是より先に平野次郎は去る壬戌七夏の頃激徒二百余人と倶に姫路の驛まで島津家に逼りて願書を差出し去ツて大藏谷に到り曰主筑前侯に説て事を挙んと計りしに其支過激に渉るが故に黒田家渠を幽閉させしふ今稔　朝廷次郎を召て学習院の督長たる時に天忠組の族大和に支を挙るのよし聞疾くも傳へ聞しうば次郎倩考ふるに彼輩疎暴の所為なる時を却て事を過つゝ然りとて我輩の一存をもて諭さんとなくの及ぶ支あらば詮術なうと思案しく豫て正義を主張せらる國事掛りの公卿方へ参殿なして言へるやう這回中山殿をとゝめ云々の面々が　行幸の御待受と号して大和へ赴きたるのよし護足の後に挙りぬ最も忠憤の做す所悪むべきの所為に孫ど尚暴動ある行迹なりとて却て　行幸在せらるゝの障りとなる支有

らんゝと深く苦慮する所のをべ願くは僕は鎮撫の命を賜はゝば躬一ツゝして彼地に到り　朝意を以て説諭をし必ず暴挙在らざるやう亟しく鎮め稟すべしと縷々密願に及ぶゆゑ公卿方ゝも駭き稍内評に及ばれしゆへ再び次郎を召せられ内願の旨趣至極せり最も渠等が做す処如何なる存慮を測り知ら称ど不日　行幸御軍議も在らせらるべき折柄なれば決して疎暴の行迹なかるべき其方到りて傳達すべし軌を渠等が孤忠も露はゝの公平の所置なるべ

先づ隠密に相心得返々も暴動なきやう説得せよと命じられバ次郎は歓び且謝して直ちに大和の五條に到り彼内命の趣き伝委曲演説なる程に天忠組の人々に於ても誰も異論に及ぶべき何ぞも命を奉じて姑く鎮静の姿にて只　行幸のうん日延相俟の外なるべし同月十九日に至り昨日京師に変動ありて毛利家　御所の警衛を除りを七卿長門へ下向の趣き追々此地に聞へしゆゑ誰とく驚愕せざるなく中ゝも平野次郎に於ては駭歎なるに大方なるべき此上は京師に到り篤と事

實を听糺せしうへ如何ふもしきを七卿の復職の義
成周旋まゝしと即日五條を発足しつ花洛をさし
く急ぎる恁りし程よ天忠組ふも十九日迄ハ京
師の風聞尚區々の取沙汰ありしゞ終よ大和の
行幸も御延引よ及ぜられたる夫等の支ハ次第
迄具よ注進ありしうへ中山殿を始めとし一同
一室よ集會做し總裁藤本鉄石等衆よ對ひて言へ
るやう追々京師より報知の模様ハ各ふも咸听を
つゝん既よ朝議の変ぜる上ハ幕府必らず兵戎
向て我を罪せんと計るらめ支の茲よ及びしうへ

居たゞゝみて阿容々々と征せうをんハ愚うあり寧
一拳よ死を決し名を高天よ輝うさんと思ふハ如
何ふと談ぜれバ誰ゝ一議よ及ぶべき其支最も潔
しと各決心なせしうへ英気日頃よ十倍して此月
廿六日よ暁霧最も深きふ乗じ總勢五百餘人當國
高取の城を攻んと西の口より找ゝて城を去ること
遠ゝね土佐町と言ふ所迄隊伍を正しく馳向へり
此高取の城と言へるハ頗る嶮岨の山城なるよ城
主植村駿州ふん近頃天忠組と号して五條よ許多
の浪士等ゞ屯集なせる躰たらく容易ならざる形

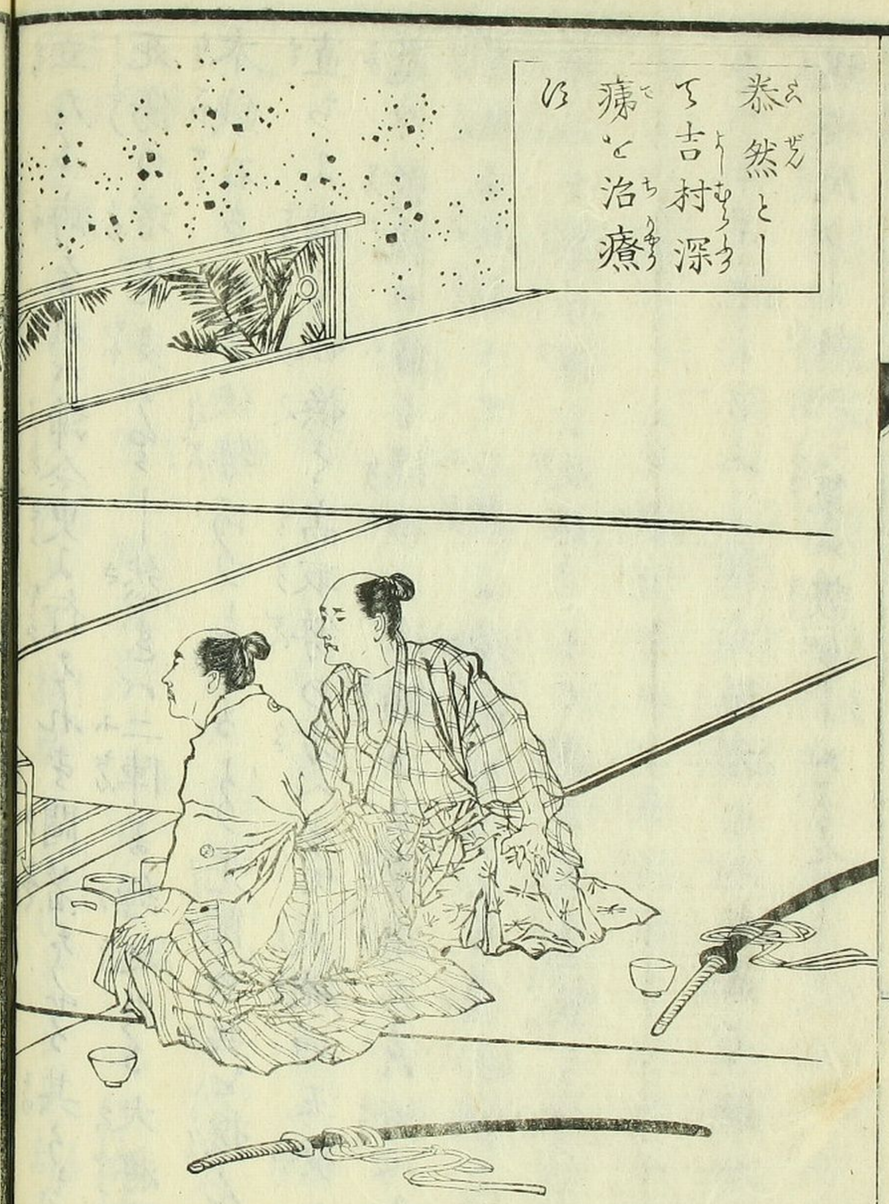
勢ひ遠く過日渠より使者を送りて鎗三十本馬二匹借用されし支もいつ尚また何時此城へ襲来候んも測られ孫を近藩郡山よりしく援兵をさん借受けて防禦の部署厳重み豫て指揮みし置たる支故敵押寄まると听くよりも先一揉に追崩さんと城門左右よりおし開きて小銃の隊を先に立彼の土佐町近找に對ひつ敵の動静窺へば折ぐ晴やらぬ霧間より赤地に菊の紋付たる旗一流れ不明見えしり備まく天忠組の方より城兵出ると見るよりも惣り切つたる壮佼等ゞ須臾も猶豫なさべくそ大小

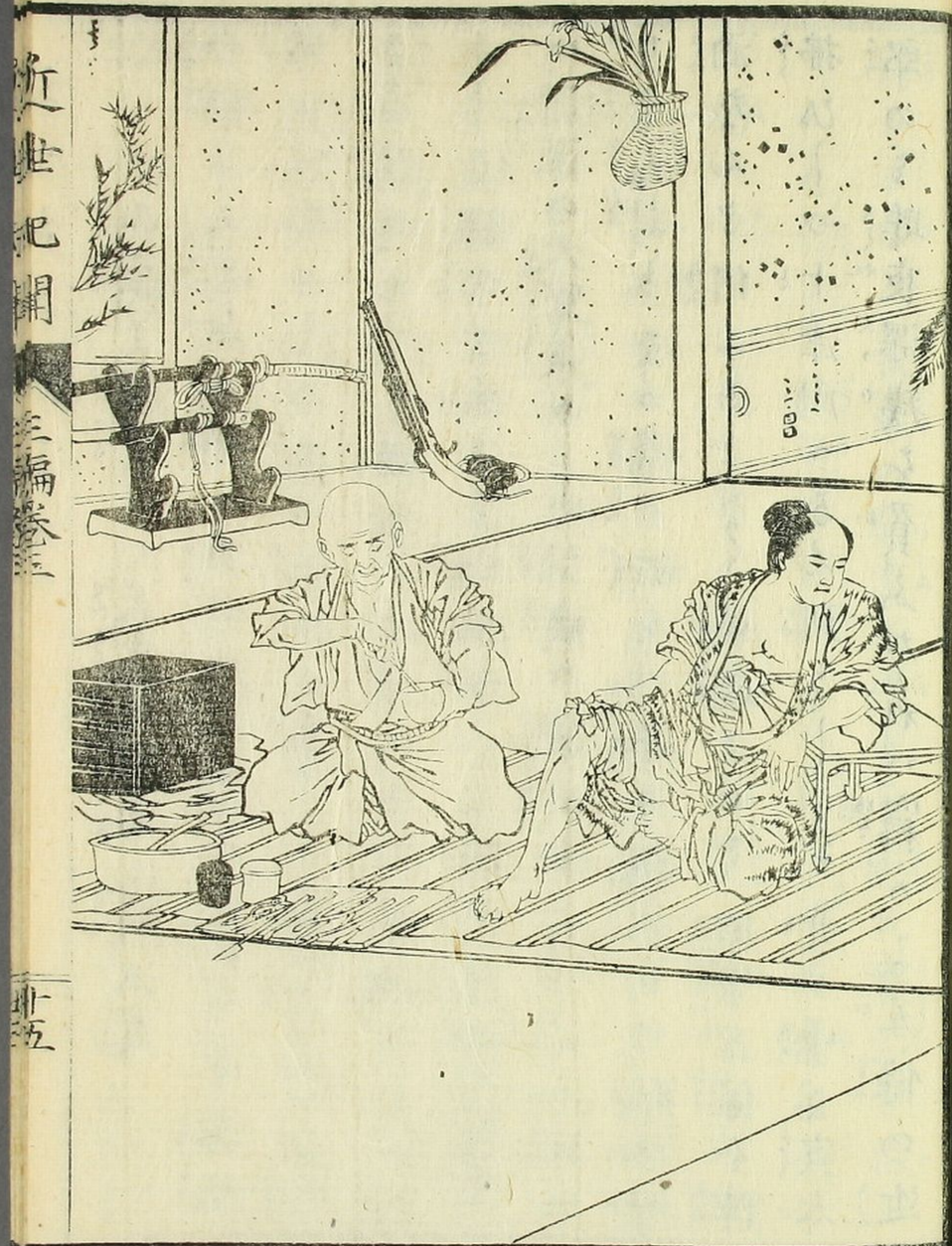
砲を打立て一挙に城を乗取らんと息をも嗅せず攻蒐れば城兵もまく豫て思ひ設けし支なきべ防戦の手を盡きみぞ數刻み及べど勝敗を何れと判ち兼たりしゞ寄手の素より剛兵なる死を塵芥とも思いねば砲丸の下をべ潜りくへ頻りに找に對ふみぞ城兵漸次に逡巡りして終に敵の放てる弾丸城に届くに至りしべ城中大いに驚きく尚も新隊を繰出し士卒を諫め激まして追崩さんとまる程に浪士等勇猛あると雖も歩卒の属ひに至りくい當所の農民猟師等を

募りて躬方より加へしるより銃砲其餘の兵器より於
くも城方よりい劣りし故思ふゞ侭より戦ひかゝ繰く
又一二町引退き姑く挑合るめぞ双方戦ひ労れろん
終より其場ハ物別れとあり相引よりん繰上さり徒て
天忠組ふくハ五條へ退陣為たりしゞ當下吉村寅太
郎ろハ諸将より對ひく言へるゆう今朝の争戦より高取
城を落さる支最も遺憾の限りあり徒く我ゞ兵因
循做さび幕府必ず命を下して不日より討隊の来る
歟し思ふより高取の兵士ども今日の軍より何れも労き
く防禦の備怠るゞられバ躬方英気を養ひ置きて今宵
夜討を蒐る時ゝ必勝疑ひなるべし其先隊を被らん
と辞尖く語り出せび藤本以下の面々も其支最も然
るゞしとく竊ろより心構へしつ其夜二更の及頃より先
手ハ吉村寅太郎ゞ百餘人をを引率して櫻井寺に
進発ゐせび二陣ハ藤本鉄石ゞ一隊の兵より将として
続いく五條を押出し彼土佐町を打越へく城下間
近く至りしゞど城ろハ箙りの光ゆも見へず静り
かゝ躰ある ふぞ偖あを今宵ハ由断しく防禦の
備も在らずと覚し先一操より乗崩せと會釈もの
で城門近く找ゞ寄らんとする折しも城の這回より

建置く所の黒門の傍に埋伏なしたる高取勢時分
きよりと思ひきん天忠組の備を目がけ筒先揃へ
し大小砲弦一度に放ち蔥るゝぞ不慮を打れし支
なれを隊中大いに駭きさく上弦下へと惑乱なきを吉
村屹度打見やりて縦ひ伏勢あるべとも何程の支
ひりぬ事を備を直しく撃破れと烈しく下知を做
せるうち弾丸一ツ飛来りて右の股より吉村が左の脇へ
貫くゝぞ凡庸の者きんゝ忽地落馬も做すべき
弦固より剛氣の寅太郎故斯る深痍を物ともせず尚
鞍壺を離れぎしく頻りに指揮に及びしうど乱れ

立たる癖なれば號令更に行れず問著なせる其うちに
死傷の者も多くて然るべ二陣に繰込たる大将藤
本鐵石も敵に伏勢ありと見るより先隊の兵を援んと
直ちに備を振換て高取勢の方へとて大砲四五発打
蔥て前後の隊を繰換んと頻りに奮激なる所へ先
陣既に敗走して二陣に壊れかゝるゝぞ盛返さんと
鐵石が屢指揮に及びしうど遂に其支整なる想岸
れとへなりしとぞ奈何なれば植村家なく此夜討
をべ知るしと言ふに豫なく間者を入れ置く敵の進
退を測りし故此一策い設けしなるべし


恭然として吉村深痍を治療ほどこす



○山嶽より楯篭りて天忠組四藩と戰ふ支
介程より天忠組ハ敵より設けの防戦とも知らず高取
城より攻寄せる不慮の敗れより至りしうへハ久しく五條
より在陣為がゝし傳聞く十津川を山嶽峨々たる所
ふしく諸方より出るより便宜多しと躬方彼地より楯篭ら
ば討隊の大軍来るとも防戦の策必ずゆうゆうと次の
日千人計りなる農民共を呼集め粮米その他味噌
酒なんど何そとなく運送させく總軍五條を陣
拂ひしつ十津川へかん到りしとそ丑ゞ中より寅太
郎のゝ昨夜深痍を負ふたれば竊りより五條の近

傍なる介る豪農の別室を借りく痲の療治を做せ
ちふも固より強気の吉村氏食の上より寝をやら
で躬い小几よりさしし俗股より腹へ抜けたる穴
より宛然火吹竹の如き療具を抜刺做しても或ハ洗
ひ或ハまゝ膏藥を用ゆるより更より面の色をも変ぜ
ば看病及び警固の為より附添居たりし池藏太磯崎
豊の両名と絶ば軍議より及びて疼きより屈せぬ形状
ゝ彼三國の時より方りく所謂蜀の美髯公ゞ臂より箭
の根を射込まれたる紙家人より掘出させゝ自
若ゝく碁を囲ゝしと和漢同一の挙止ゝるの吉

村ゞ剛氣なる関羽の右より出べしと其頃評したりしとふん恁りし程より寅太郎ゞ弾丸疵少しく愈たるより討手の軍士等程近く進みたりとの風説ありみぞ廿八日の朝間より駕籠ようち乗り吉村ハ十津川へとぞ赴きける什麼此十津川郷と言へるハ吉野郡の内より行くく彼大峯の麓続きなり偖此郷の入口筏天の川の辺と号して三里計りの曠場なれども山懐の疲村なれバ家負ハ尓のみ多くねど是より何程へ到る道も嶮岨あしく泛と言ふ支なり孫を最も堅固の要地なる故天忠組の面々まづ頓て此地より陣営を構へ出口々々より砲塁を設け或ハ番所筏建などしく兵士筏所々より分配ゐし厳しく出入を吟味せり あるより依て十津川近郷多くハ是より與せしみ近き頃京師ふく浪士の鑿穿厳重なる故花洛を脱せし諸浪人の此時来り加りしうバ總勢二千餘人より及びく一時猛威を示せしとぞ是より先より幕府より於ても大和の挙動を听くと等しく猛可み紀州家藤堂家彦根郡山の四藩をして追討の義を命ぜしむ仍て件の藩々ハ各兵士筏引卒して大和の五條より着陣せしより敵ハ速くも此地を去て

十津川天の川の辻より楯篭もるの趣きあれを天忠組より建置く所の彼制札を破却して原の制札より改め拵へつ四藩軍議をせしうえ各攻口へ兵を分け不日より撃て蒐るべき准備専らなる折ふ既に九月五日より至り中山侍従殿よりし渋谷伊与作と喚ぶ者を使節と号して藤堂家の陣屋へ遣はし言はるやう我が輩攘夷　御親征の先鋒を望むが故より　行幸御待受とし先達て発向み し奸吏源内等を誅戮し頻りに近藩を鼓舞せしも何卒征夷の　御軍議を因循させとと思計りし誠心の做す所ありしに京師に讒奏する者ありて朝議一変為なるよう　行幸御延引に至り咱們が憤忠も遂に画餅となるのみこうに追隊弦差向けられし支遺憾此上なしと雖も時運の然らしむる処又奈何ともせん詮術なし余とも武門のみひ手を束ねて討るべきに在ら務を力の限り抗戦して尸を山岳に肆さんと一同決心做しつれども憂國の素志露はきずして乱臣賊子の名を遺さん支死しての憾き其上なし貴藩空しく我が輩の正邪の間を諒察なく不義に陥らざらんやう異日評論なくん支を依

頼なるべき其為に使節に及ぶ所あらと静に委情を演るあぞ藤堂の家士うち听て御使者の趣き兼知せり國許主人へ稟し聞け御返答に及ぶべきれば一両日の其間當所にお扣へなるべしと最懇懃に取扱ひ番兵妻人數附置く此旨至急に本國へ稟し遣ハしたるにより藩主泉州侯に於くも事情余義なく思されん躰く建白せらるゆう這回和州五條に乱妨に及びたる浪士等追討致すべき旨命令を被りく人數差向け候處去る五日浮浪の一人渋谷伊与作と言へる者陣所に罷越したる故種々相調べ

候ひしに元来見込ハ相違致せど尊王攘夷の支に於くも身命を抛ちく飽迄存ド込たる形状全く乱臣賊子とのみ只一向あも言ひがたくんに殊にハ今般攘夷の儀も更に仰出されば今皇國にて勇肝の士を畜へ置きたる紙一時滅盡做さん支惜むべくも存ぜれば通に寛典の御所置をもて鎮撫の御沙汰に及せれ浪士等夫々生國へ引退くやう命ぜられ然しく後に回主にく其曲直を糺すべき旨仰付られ候て如何御座なるべくんや追討の任我蒙る身にて箇様に稟し上る條深恐縮

仕れど攘夷拒絶の機會に臨み可惜人民を損ぜん
支　皇國の御為に宜しからぬと存じ候へば愚意
を建言仕りぬ尤も遠隔の地と申し彼是隙取候ゆ
先鋒の者共は一途に成功を奏せんと奮發致し候
へば最早追擊致し居らんも量り難く候事故此義
御許容有んかは至急に御沙汰あらんなれば自顧ひ出
らるたりしかど深く浪士の暴動を悪ませ玉ふ故に
やはたらん御採用ひなかりし虚に日數を経る程
に既に其月六日に紀州の隊長水野多門が許多の
兵を率へて天の川へと馳向ひ大小砲を撃ちかけ頻

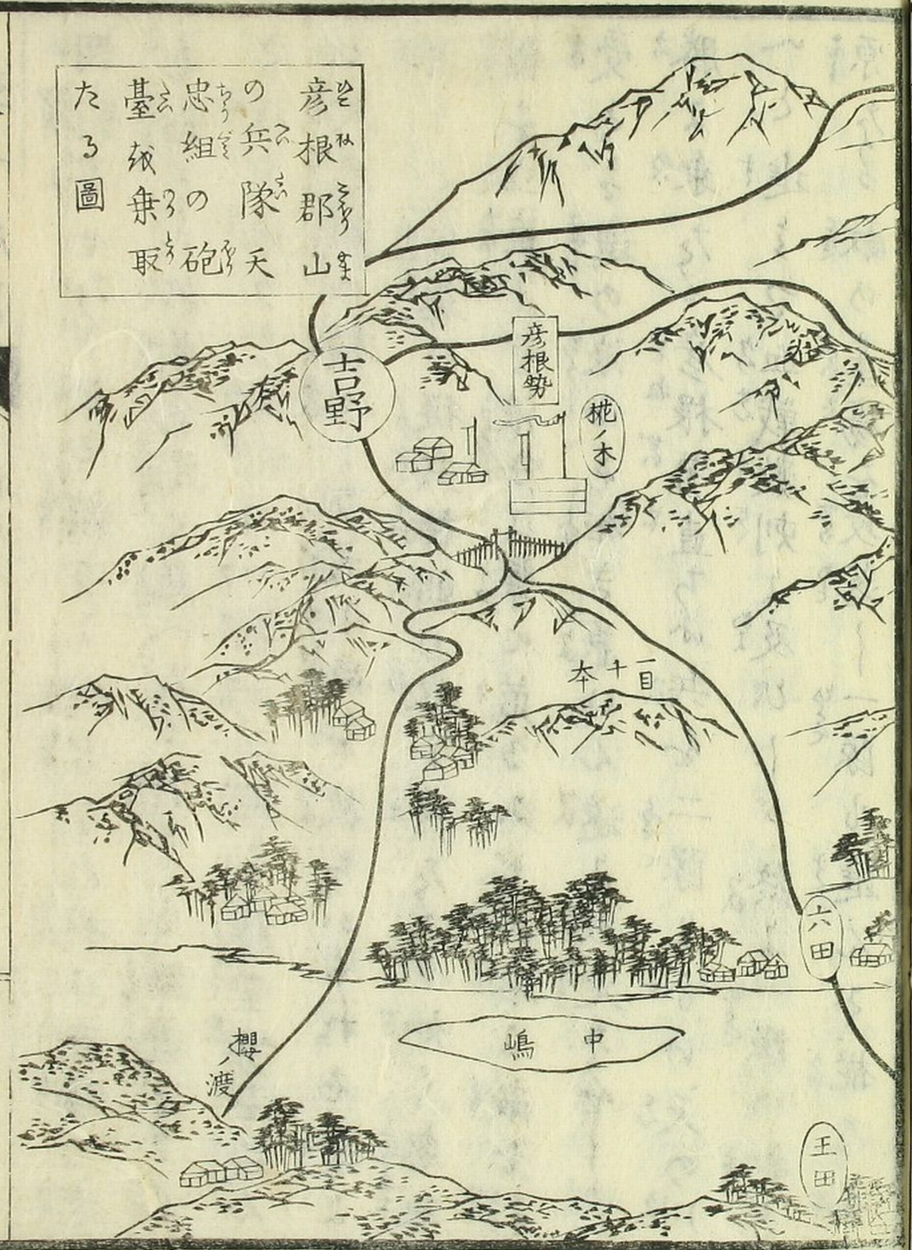
に戰ひを挑むめど天忠組の方にては險岨を憑み
て陣取りなれば木陰或は岩陰より敵を目下に見
おろして覘ひ撃に做せしかば寄隊も剛なりざる
に在らず浪士の弾丸に虚矢を射かけ死傷の
者も夥しかりしに隊長水野も痍を負ふなれば終に
敗れて退き偖藤堂の陣營にも急飛を本國へ
遣はしたる報知をいまだ在らず紀州勢に
魁してやや一戰に及びしかば彦根郡山の両家にて
も出兵なるべき形勢なれば紙默しても在るべき事な
らず孫を後日の沙汰に兎も角を使者に来りし伊与

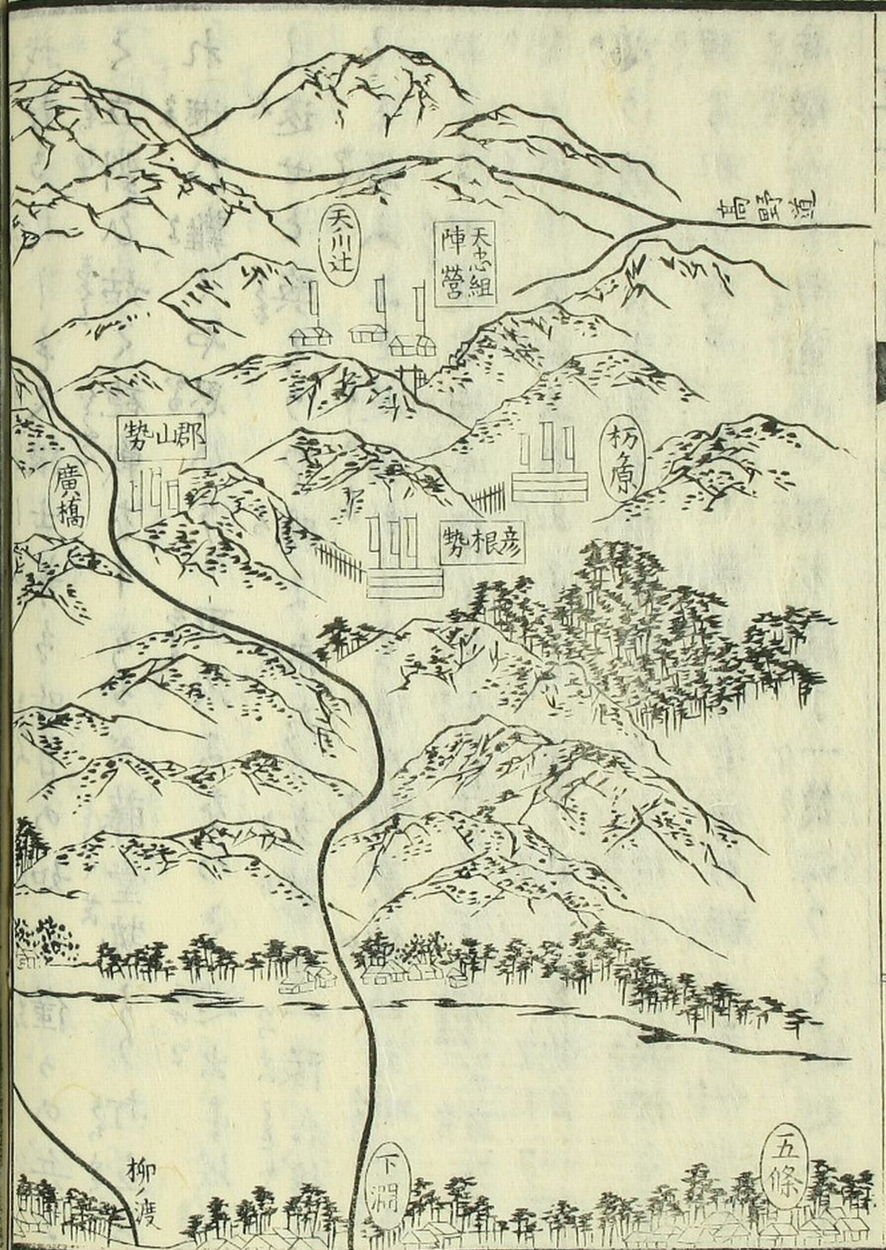
作徒取逃しくハ相濟ぬとく渠等主僕を縛めく明長持の中へ入れ六十余人ゟ警衛させく同國古市と言ふ所ゟ藤堂家の領知ゟれを开処へ一先召連行く嚴しく禁錮なさしめつ斯做しく七日ゟゝ隊長藤堂新七郎一隊の兵を引俱しつ和田村と言ふ所ゟ到れを小村なぐらゟ人家もゟれを茲ゟ姑く陣を構へく敵の動静を窺ふめぞ天忠組ゟゝ要害の地へ些の兵士を出しつ稍砲戰ゟ及ぶ程ゟ天忠組の方ゟくハ弾藥不足なりけるゟ漸次ゟ砲勢弱ゟ成見て藤堂勢ハ勇ゟ立ち高の知れたる烏合の小賊一挙ゟ渠等ゞ巣穴迄擊潰せよと喚りつ大小砲を連發しく頻りゟ山手ゟ押登れを浪士等終ゟ拒ぎかゝ孫ゟん各四方へ散乱せしゞ山へや入ゟん谷へや落けん須臾のうちゟ敵一個も目ゟ遮る者ゟくざれを尚山深く攻入らんゟと思ハざるゟ在らねども茲より奥ゟ別てなり険岨の上ゟ路狹く二個と竝び行き難き場所さゝゟと思ハるゟ日もちや西ゟ傾きたれを浪士の輩ゞ打棄往きし旗一流ゟ取りしく凱歌を唱へく歸陣しつ偖次の日ハ早天より藤堂玄蕃を將として又和田村迄出張せしゟ

昨夜藤堂新七郎が退陣ふせし其跡へ浪士等来り
て火を放ちけん和田村の人家十四五軒總て焼失
なりて灰となりぬ這も是藤本銕石等が深くも計りし事
ふして這所の人家を置く時も寄隊の足溜りとな
りて敵方の害なれども此日も彦根郡山も各
兵残分配して諸口より攻登れば藤堂玄蕃ハ
真先に兵を找めし事ふるに新七郎が昨日の咄し
に敵も至りて小勢なる上弾薬乏しき躰なりと傳
へ聞たる事なれば今日も必ず巣穴まで襲ひて賊
主殺擒にせんと總勢大いに憤発して漸次に兵を

找むる折しも又浪士等も昨日の如く僅かの兵に
て立對ひ姑く砲戦なりしが藤堂勢より打立ら
れ愜ひ難くや思ひきん取次になつて逃出す紙汚
し返せと喚きつて勝に乗たる玄蕃が一隊我後れ
じと思ふあまり足並乱して追ひ行事稍四五町に及
びしに四邊に樹木森々と生茂りたる所に出たり
徒る折しも向ふの山より合圖と覚しき砲声一発
鳴り渡るよと見る間もなく木立間なる其裡より
現れ出たる一隊の敵兵藤堂勢の群がる中へ筒
先揃へて打放れバ備を敵に一策なりて這処へ

彦根郡山の兵隊天忠組の砲臺を奪取たる圖





囲引寄せたるぞと頻りに問着なる程に死傷の者も尠からず最も危く見へたる折しも脇道より一隊夫と見て藤堂勢を援んと天忠組の横合より大小砲を放ちかければ爰に至りて玄蕃の従兵轍鮒の水を得たるが如く忽地備を立直して浪士に撃て蒐るゆゑ左右に敵を引受て遁の浪士も拒ぎ兼けん遂に敗走なせしかば勝に乗たる彦根勢直ちに兵を二隊に分け天の川へと進みて血戰数刻に及びしが終に一隊は杉が原なる敵の臺場を攻落し一隊も進んで椛乃木なる砲臺を乗取りしかば両所に井伊家の旗を立て其夜を開処に宿陣せり扨郡山の勢は於も此日辰の刻下る頃下市より進発して廣橋村なる敵の屯所へ馳向えんと心ざし岩松村まで押寄しに山間或は樹林より浪士等例の小勢なる形を躯して砲発せしかば相手と聢と見定ぬ戰ひを做さるあれば寄手大いに迷惑為たれど渠が放せる砲煙の上る所を目途として這方も抗戰ぶりも頻りに兵を找もる程に道路に薪を夥く積て火を掛け遮りしかば寄隊消防なんとまれど山中水に乏

あれよ折しも山風吹荒き猛火盛んに燃上れば兵士等是に行悩みて須臾延停ふ折あるを豫て浪士の屯所となしたる廣搗村の法泉寺と言ふ寺院の前なる砲臺より大小砲を打出すぞ郡山の兵士等も小銃及び破裂丸など頻りに放蒐しかば彼法泉寺を始めとして在家四五軒焼亡せり爰に至りて天忠組ふも防ぐに術やなきうん臺場を棄て退くぞ寄隊をいよく憤激して夫遁まるを喚きつて息を限りに追蒐しかど樹木茂りし中なれば何れをさして逃散うん遂に行衛の知れざるばかり浪士の残せし木砲と幕の属を分取して軈て退陣為たりける余程に天忠組の軍師と听へし安積五郎ハ藤本以下の浪士等に打對ひて言へるやう今日の戦ひに奇計を以て藤堂勢を悩し呉んと思ひしに彦根の為に妨げられて躬方敗走せしのみならずいよく彦根ハ勝に乗じて臺場二箇所を乗取るをうり自餘の藩士ハ退陣せしみ渠のみ一隊で山中に宿陣るせる躬たるく敵を小兒の如く思へる傍若無人の挙止なり殊さら躬方の要地をべ久しく渠に奪れて滞陣せらるく其時るへ躬方に取りて害多し仍て那処へ夜討を蒐け一泡吹ら

せく退ろせんと言ふよ各一議よ及ぶ其支最も然るべしとく軍議一決為たりしく特り切たる英勇のミ僅ろふ五十人だろう其夜四更の及頃よ天の川をべ打立て案内知つたる間道より彦根の陣よ押寄せたる此場の勝敗奈何あらん其委しを知らんと欲せば編を改め巻を更て第四輯よ記載まる紙看て知るべし

近世紀聞三編巻之三終

東京

通壹丁目　北畠茂兵衛
同二丁目　稲田佐兵衛
芝三嶋町　山中市兵衛
通二丁目　小林新兵衛
横山町壹丁目　出雲寺萬次郎
浅草茅町一丁目　北澤伊八
横山町三丁目　太田金右衛門
本銀町二丁目角　山中孝之介
馬喰町二丁目　田中治兵衛
通油町　水野慶次郎
馬喰町二丁目　山口藤兵衛
横山町三丁目　辻岡文助

書肆

早稲田大学図書館
011688996025